

58歳で拓いた新たな舞台で  
キャリアの総力を熟成させる

玉村豊男氏

エッセイスト・画家・農園主



Toyoo Tamamura\_1945年東京都生まれ。東京大学フランス文学科在学中にパリへ留学。卒業後、通訳・ガイドなどを経て執筆活動に入る。旅と都市、料理、田舎暮らしなど幅広いテーマで執筆を続けている。83年に東京から軽井沢に転居、91年には長野県東部町（現・東御市）で農園を始め、2004年ワイナリーも開設。近著に『オジサンにも言わせろNPO』（東京書籍）、『今日よりよい明日はない』（集英社新書）など。

## CAREER CRUISING


キャリア・クルージング

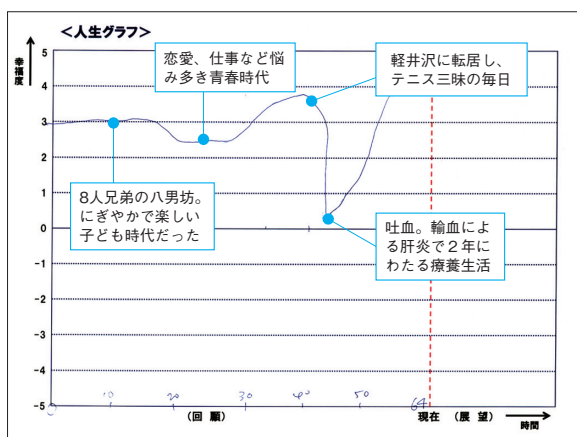
Interview = 大久保幸夫、泉 彩子  
Text = 泉 彩子（60～62P）  
大久保幸夫（63P）  
Photo = 鈴木慶子

キャリアとは「旅」である。人は誰もが人生という名の旅をする。人の数だけ旅があるが、いい旅には共通する何かがある。その何かを探するため、各界で活躍する「よき旅人」たちが辿ってきた航路を論考する。

長野新幹線上田駅から車で20分。標高850メートルの南向き丘陵地に、1万5千坪ほどの農園とワイン醸造所、カフェレストランがある。エッセイストとして知られる玉村豊男氏が経営するワイナリーだ。洞爺湖サミットでは、ここ「ヴィラデスト」の白ワインがランチ用に使われ、話題を呼んだ。この地に暮らし、地域に根ざしてワインや野菜を作りつつ、執筆や料理研究、絵画と多彩な才能を開花させてきた玉村氏。その生き方に迫る。

## 玉村豊男氏 キャリアストーリー

1945年	0歳	東京都杉並区に画家・玉村方久斗の八男として生まれる。6歳で父を亡くす。
1961年	16歳	都立西高校に入学。油絵に熱中する。
1965年	19歳	一浪の末、東京大学（文化三類）に入学
1968年	23歳	パリ大学言語研究所に奨学金留学するも、学園紛争の影響で授業が始まらず、欧州・北アフリカを放浪。料理や食文化に興味を持つ。
1971年	25歳	帰国後、東京大学フランス文学科を卒業。フリーのツアーガイドや通訳・翻訳で生計を立てる。
1973年	28歳	朝日新聞社のタブロイド紙の制作にフリーとして参加。取材経験を積み、出版業界に知己を得る。
1977年	32歳	デビュー作『パリ旅の雑学ノート』を刊行。以降、エッセイストとして人気を博す。
1982年	37歳	取材旅行中の自動車事故で大けがをして入院。その翌年、軽井沢に転居する。
1986年	41歳	C型肝炎に。病氣療養を機に、絵を再開。
1991年	46歳	長野県小県郡東部町に転居。農園を始める。
		
		はじめてのじゃがいもの収穫。一年の苦労が豊かな実りにつながる
2004年	58歳	醸造免許を取得し、ワイナリーを開設。4月にはカフェ&ショップも併設し、「ヴィラデストガーデンファームアンドワイナリー」を開設。



直筆の人生グラフ。「生きている限りは、マイナスというのはない」と玉村氏。肝炎を患った40代前半で急降下するが、その後は上昇続けている。

## 社会的に「みそっかす」として生きたい 組織に属することを良しとしなかった

8人兄弟のなかで年の離れた末子として生まれ、兄たちの仲間に入りきれない寂しさを抱きつつも、しがらみに巻き込まれない気楽さを感じて育った。

「その影響でしょうね。社会的にも『みそっかす』として生きたいと思い続けてきました」

言語学に興味を持って東京大学に進学し、自由な雰囲気にならなくてフランス文学科を選択。学者になるつもりが、失恋を機にパリ大学へ留学した頃から起伏に富んだ人生が始まる。学園紛争の影響で授業が始まらず、これ幸いと欧州や北アフリカ諸国を放浪。各地の料理や食文化に興味を持ち、文化人類学を学び直すことを考えた。「ところが、2年後に帰国したときには勉学の意欲も、学者になる気も失せてしまいました」

当初は就職を考え、テレビ局に内定。しかし、玉村氏は事前研修での団体行動に強い違和感を抱き、辞退してしまう。以後、執筆を始めるまでは、フリーのツアーガイドや通訳、翻訳で生計を立てた。大阪万博をきっかけに海外への関心が高まり始めた時期で、フランス語と英語に堪能な人材は引っぱりだこ。大卒初任給の平均が3万7000円の時代に、大学を卒業したばかりの玉村青年は月10万円を超える収入を得ていた。社員への誘いもあったが、どれも即座に断ったという。

「人に使われたくもないし、将来的に人を使うのもイヤだと。とはいえ不安定な身分ですから、語学を身につけていたのは助かりました。後に原稿を書き始めてからも、『文筆で失業しても、細々と翻訳をやれば飯は食えるだろう』と気持ちの拠り所になりましたから」

翻訳を通して文章に興味を持ち始めていたとき、タウン新聞への応募作品が編集部目の留まり、朝日新聞社

発行のタブロイド紙でフリーのライターとして活躍。当時の編集者仲間の勧めで書いた『パリ旅の雑学ノート』を皮切りに、エッセイストとして人気を博すようになる。

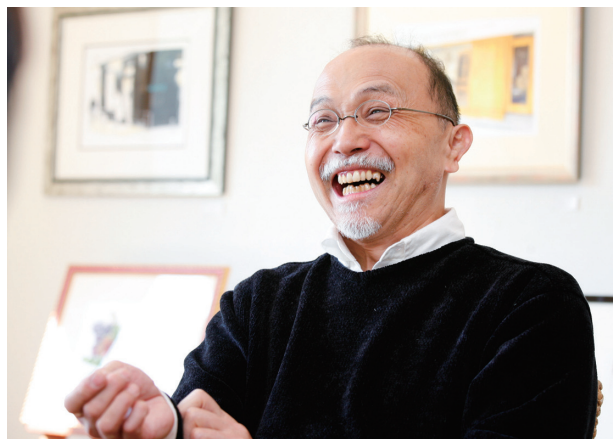
#### 40代の大病をきっかけに 絵筆を握り、畑仕事を始めた

知人に強く誘われ、40歳を前に軽井沢へ転居。生活の変化に伴い、「田舎暮らし」や当時始めた「テニス」など執筆テーマが広がった。仕事の依頼は増え、東京との往復をしていたある日、過労とストレスから吐血。さらに悪いことに病院で輸血を受けてC型肝炎に感染し、生死をさまよった。

退院後も2年間の療養生活を余儀なくされる大病だった。死を意識し、残りの人生をどう生きるかを自らに問う日々のなかで、青年期以来遠ざかっていた絵を再び描き始めた。

「終の住処」を求め、眺望に魅せられて長野県東部町(現・東御市)に居を移したのもこの頃だ。農園を作って畑仕事にのめりこみ、収穫したぶどうを委託醸造して自家用ワインを楽しむうちに、ワイナリーを経営するに至るが、最初は将来の成功への確信などなかったという。

「畑はもともと妻の趣味。僕はこの丘の斜面を見て、『フランス人なら、ぶどうを植えるだろうな』と思いついただけです。元来、僕は明確な意思を持って物事の勝負に出た試しがない。大きなイメージは描きつつ、自然の流れに逆らわないようにしているんです。そして、長すぎもせず短すぎもしない、その時の自分に合った『流木』を見つけるとすぐに飛びつく。この繰り返しでした」



#### 血湧き肉躍るような仕事をしたい 還暦を前にワイン事業に踏み出す

ワイナリーのオープンまでの顛末は著書『花摘む人』に詳しいが、資金問題に加え、日本のワイナリーには酒税法による規制など課題も多く、誰もが反対したという。

「でも、50代の今やらねばと。不思議と『もうダメだ』と思った瞬間に、道が開けるということが続きましてね。やれるところまでやってみることにしました。僕は日常雑記を書く人なので、頓挫してもネタにはなりますし」

とはいえ、「執筆業を始めた頃は、万一に備え、年収分の貯蓄を心がけた」という堅実な一面も持つ玉村氏が、億単位の借金をしてまでワイナリーを作ろうとしたのはなぜだろう。

「農園を始めて体調も快復し、落ち着いてくると、血湧き肉躍るような仕事をしなくなったんです。50代で『安定』なんて早すぎますからね。後は若い仲間に託すつもりですから、気楽なものです」

「人に使われたくもないし、人を使いたくもない」と思い続けてきた玉村氏が、今はアルバイトを含め40人を超えるスタッフを雇用する。

「最初は『自分がやったほうが早い』と歯がゆかったこともありますよ。でも、時間が経つと、僕にはないアイデアを発揮したり、意外な成長を遂げたりして、人は面白いなと感じるようになりました」

ワイナリーが軌道に乗るには、一般に10年単位の時間がかかるもの。「ヴィラデスト」も例外ではないが、地元の観光名所となって集客力をつけ、赤字をカフェレストランの収益のほか、執筆や絵画の収入でまかなううち、なんとか収支の目処が立ってきた。

「意図したことはありませんが、ここには僕がやってきたことすべてが表現されています。思い入れはありますが、5年後には仲間に経営を引き継げる状況にしたいですね。僕には子どもがいまいませんから、いずれはこの土地も次世代の人たちが生かしてくれればと思っています」

玉村氏は今後の生き方についても、これまで通り自然の成り行きに任せるという。

「放浪の旅に出るのもいいですね。寅さんのように時々フラリと帰ってきて、レジのお金を拝借し『玉村さん、困ります』なんて言われるのも乙かもしれない(笑)」

■ 玉村豊男氏のキャリアをこう見る

## 偶然の機会を最大化する 流木をつかむ人生

大久保幸夫

ワークス研究所 所長

玉村氏はみずからの人生を「流木をつかむ人生」と呼んでいる。夢や目的を追いかけて努力していくのではなく、たまたま身近に流れてきたい話（流木）にパッと飛びつくことの繰り返しだった、というのである。

「キャリアは偶発性に支配されている」というのは、キャリアの研究で知られる米・スタンフォード大学クランボルト教授の言葉である。綿密に計画を立てても人生にはあまりにも予期せぬ出来事が多く、思うようにはならない。それならばオープン・マインドで偶然を受け入れ、その価値を最大化することが重要だとしている。

ただし、「流木をつかんだだけ」のラッキーな人生というだけでは、玉村氏のようなキャリアを理解することはできない。ただ、流木を待つだけではない。待つにあたっては2つの大事な要素があり、さらにつかんだ後に大事な要素が2つ隠れているのである。

事前の要素は、私的セーフティネットと愛嬌である。彼は雇用されずに生きていくために、常に年収1年分の貯蓄を用意し、かつ、いつでもそれなりの収入を得られる翻訳など手に職を持っていた。そして豊富な人的ネットワークを構築してきた。これらがすべてセーフティネットとなっていたので、チャンスと思ったときに即断・即決することができたのだ。

加えて、玉村氏特有の笑顔・愛嬌である。誰もが惹きつけられる魅力を発信することで、自分に合った流木を呼び寄せていたのだろう。

流木をつかんだ後の2つは、のめりこみと文章による金銭化である。つかんだ流木に徹底的にのめりこみ、必ずモノにしてしまう。まるで子どもがお気に入りのおもちゃに出合ったかのように、飽きずに毎日毎日やり続ける。

そしてもう1つはエッセイに書くというリスクヘッジである。やったことはすべて文章に書くという方法で金銭化できる。仮に失敗してもそれはそれで書く素材になる。

これらの要素が「流木をつかむ」前後に見事に配置されているからこそ、彼の自由闊達に見えるキャリアが成功しているのだ。

玉村氏の「偶然の機会を最大化する」構造

